

### 19. 成田赤十字病院における大腸癌治療成績

土地岳彦 (成田赤十字)

97年～03年の7年間に行われた大腸癌手術症例は577例。主腫瘍を切除し追跡可能だった500例を検討。男女比は305:195, 年齢は24から97歳。結腸癌, 直腸癌の他病死を含む累積5年生存率はそれぞれ58.4%, 62.3%で, 合併症発生率は25.6%, 37.2%だった。Dukes'分類による進行度別生存率は大腸癌全国登録と遜色の無い成績であった。術前腸閉塞を併発した症例の合併症発生率は高率だった。

### 20. 強皮症に合併した食道癌の1例

深田忠臣, 森嶋友一, 青木靖雄  
小林 純, 小林信義, 豊田康義  
横山航也, 鈴木一郎  
(国立病院機構千葉医療センター)

強皮症の食道扁平上皮癌合併は非常に稀で, 0.1～1%程度である。英文報告は8例, 本邦では1例である。強皮症の維持療法ではステロイド投与が不可欠で, 長期ステロイド曝露がある症例では, 合併症リスクの上昇が危惧されるが, 強皮症の病態が安定していれば, ステロイドの維持補充投与及び術式選択にて, 安全に手術及び術後管理が可能である。また, 強皮症はmalignant potentialの示唆もあり, その前提で経過観察が必要である。

### 21. 外傷を契機に急性呼吸循環不全に陥った食道裂孔の1例

尾内康英, 嶋村文彦  
(千葉県救急医療センター)

横隔膜損傷による外傷性横隔膜ヘルニアでは, 呼吸・循環不全状態が生じることは稀ではない。今回, 既存の食道裂孔ヘルニアが外傷を契機として急性増悪し, 急性呼吸・循環不全を呈した稀な症例を経験した。来院時, 緊張性気胸と同様の病態であり, 初療室での胃管挿入・内容の吸引・減圧を行い, 状態の劇的な改善を得た。食道裂孔ヘルニアの外傷症例では本症例のような場合も念頭に置き, 適切な救急対応が必要であると思われた。

### 22. 胃粘膜下腫瘍の1例

河野宏彦, 大嶋博一, 大森敏生  
姫野雄二 (国保国吉)

症例は35歳男性。検診にてSMTを指摘され当科紹介。GFSでは, 体下部前壁に, SMT病変を認めた。

EUSでは, 第3層に主座をおく多房性腫瘍性病変を認めた。上部消化管造影では, 約7cm大の腫瘍性病変を認めた。腹部CTでは, 多房性囊胞性腫瘍像を認めた。以上より手術施行。摘出標本は, 異所性囊胞を伴う異所性腺の診断であった。

### 23. 重複胃から発生したと思われる巨大粘液性囊胞腺癌の1例

林 達也, 若林康夫, 大野一英  
升田吉雄, 遠藤文夫, 新井竜夫  
増田益功, 尾形 章, 橋場隆裕  
宮崎大輔 (松戸市立)

重複胃は非常に稀な先天性疾患であり, 発癌に関する報告はほとんどない。今回我々は重複胃から発生した粘液性囊胞腺癌の1例を経験した。胃重複症は特徴的な画像所見がなく, 診断は病理組織学的所見によることから術前診断は困難であるが, 腹腔内囊胞性腫瘍の鑑別診断の一つとして念頭におく必要があると考えられた。また胃重複症には悪性腫瘍合併の可能性もあることから, 診断的意義も考慮し外科的切除が必要であると考えられた。

### 24. 臍腫瘍にて見つかった子宮体癌の1例

長谷川留魅子, 白井芳則, 一木 昇  
(国立病院機構下志津)

内臓悪性腫瘍の臍転移 (Sister Mary Joseph nodule) は予後不良の兆しであり, しばしば原発巣に先行してみられる。我々は原発の子宮癌の診断に先行し発見された臍転移の1例を経験したので, 文献的考察を加え報告する。症例は67歳女性, 臍部の発赤腫脹・体動時の痛みがみられ当科受診, 臍部に腫瘤を認め局所切除施行。腺癌の診断にて検索したところ子宮癌の診断となり, 子宮全摘, 両側付属器切除術施行。

### 25. 急性虫垂炎手術におけるwound protectorの使用経験

芝崎英仁, 安倍己紀男, 河木 潤  
飯塚 勇, 田村英彦, 野村 悟  
上村公平 (安房医師会病院)

急性虫垂炎手術に創被覆効果が高いと考えられるwound protector (商品名: Lap-Protector<sup>TM</sup>, 八光商事社) を使用し, 術後の創感染防止, 手術時間・入院期間の短縮に有用であるか否かを検討した。

Lap-Protectorの創被覆効果により創感染が有意に改善し, 入院期間が短縮した。また, 安定した術野の確保により手術時間の短縮が得られた。